

第2章 アユのエサ釣り漁—南四国の調査から—

常光 徹
(国立歴史民俗博物館名誉教授)

はじめに

アユ釣りには、広く知られる友釣りをはじめいくつかの漁法がある。エサ釣りもその一つで、現在、各地で行われているが、その実態についてはよく分かっていない面も多い。本稿では、南四国の河川、とくに高知県を中心に徳島県の海部川でのアユのエサ釣り漁について報告する。聞き書き調査から浮かび上がった釣法の特徴について指摘するとともに、共同研究のテーマである汽水との関係について述べる。とくに、秋の出水を引き金に、川を下った落ちアユの群れが河口付近に集まりやすいことから、汽水域がエサ釣りの格好の釣り場になっている点について言及する。

1. 安田川のエサ釣り—高知県安田町—

高知県安芸郡を流れる安田川は、同郡馬路村稗己屋山（1228m）に源を発し、安田町で土佐湾に注ぐ延長約30kmの河川である。2016年7月23日、安田川の下流で出会った地元の方に、アユのエサ釣りについて尋ねたところ、即座に「エサ釣りなら名人がいるよ」という返事が戻ってきた。それが松本義嗣さん（1946年生れ・男）だった。さっそく、松本さんの仕事場におじゃまをして、安田川のアユのエサ釣りについて話を聞かせていただいた。

（1）納得できるまでエサ釣りを研究

松本さんは、郷里の安田町に帰って仕事をするようになった30歳頃からエサ釣りを始めたという。当時、伊尾木川（安芸市）に釣りに行ったとき、周りが釣れていないのに一人だけよく釣っている人がいた。その人にエサのノレソレ（アナゴの幼生）を2匹分けてもらったが、使わずに持ち帰り、その色とか硬さなどを真似て自分で作ってみた。最初はうまくいかなかったが、いろいろ研究をしてみて、自分なりに納得するエサが作れるようになるまで2年ぐらいかかった。どう作るかは、なかなか口では説明がむづかしい。アユはエサを口に入れるとパツと放すくせがある。食った瞬間に鉤にかかるようなエサを作らないといけない。エサは普段は冷凍庫に入れて保存しておき、釣りに行くときに必要な分だけを持っていく。

エサ釣り用の鉤はチカバリといい、ノレソレを小さく切ってさす。ハリスは大体0.3号を使用するがときには0.4号を使うこともある。錘は3Bをつける。ウキも特定ものを使うが、ウキ下の調整ひとつで釣れるかどうかが変わってくる。ウキ下の長さは、川の深い浅いでは変えるのではなく、そのときのアユが底にいるか上にいるかによって調整する。撒き餌が効いてくるとアユは浮いてくるので短くする。

撒き餌には、ジャコ（シラスのこと・主にカタクチイワシの稚魚）を使う。値段が高くて小さいものを買って来て塩出しをし、舐めてみて塩辛い状態にする。塩出しをやりすぎると真っ白になってもちが悪くなる。撒き餌は、川原に持参した俎板の上でみじん切りのように細かく切って使う。鉤にさすエサのノレソレも川原

で切る。家から切って持っていくと弱ってしまう。ジャコは最初にある程度まとめて買い、冷蔵庫に入れて置いて必要な分を取り出して使う。

ノレソレのエサの作り方で一番肝心なのは、撒き餌をまいたときに、ジャコ（シラス）の色とノレソレの色が同じ状態で流れる色にこしらえるのがむづかしい。新しいジャコは水の中に入れるとわりと白くなる。そのジャコの色とノレソレの色が大体同じような状態にならないと食いがよくない。

川の水が出たあとで、すこし濁っているときは食いがよい。気をつけなければいけないのは、アユがいても、水がふき上げるようにうずを巻いている状態のところは、いくら撒き餌をしてもジャコがアユに効かない、捨てるようなものだ。撒き餌をしたときに、ジャコが回りながら沈んでいくようなところがよい。

エサ釣りは朝が一番。川原で夜が明けるのを待つぐらいがよい。釣りに行くときは、前の晩に用意をしておいて、家を4時ごろに出て行く。今頃（7月）だと、朝の内は上のほうの深い淵で食うが、日が出ると下へさがって、下の方の淵だったら淵のしまい（淵尻）の方で食うたりする。夕方もよいが、夕方よりも朝がよい。9月過ぎたらアユが下がってくるので、その状態を常に見ている。大水が出たときは河口で釣ることもあるが、普段はあまり釣らない。エサ釣りは川の上流でも釣れるが、9月以降に大きな水がでると、上流にアユはいなくなるので下の方で釣るようになる。

竿はエサ釣りを始めたときからグラスファイバー製で、竹竿は使っていない。愛着があってほとんど同じ竿を30年ほど使っているが、竿先がある程度やわらかいものがよい。今は長さ5.4mの竿を使うこともある。

釣る時は糸のヤマはある程度張っておいて、アユが食ってピクリとしたらその瞬間にパッと合わす。そのタイミングをつかむまでがなかなか苦労する。ふつうの人は、糸が竿の尻から30cmぐらい長いのが手ごろ。投げこんだときに都合がよい。投げたときにウキの音がしないように投げるのがこつ。最初の10回ぐらいはアユも怖じないが、それを繰り返すと怖じる。投げたときに竿を調整してウキをコツリと水のなかへ落とすような感じにしたら、ながいあいだ釣れる。ずっと音を立てていると食わんようになる。

川にアユが多くいても食わんアユは食わん。9月ぐらいまでのアユは、エサ（撒き餌）を食わしながら釣る。食いだしたらエサを少なくし、食いが落ちたらまた量をふやす。まあ、多い時は何百も釣ったことがある。それは水が出たあとで、水が引いてうす濁りになったとき、澄む前がよく釣れる。川底が見えるか見えんかぐらいで、茶色い色が消えてきた状態がエサ釣りには一番よい。

アユの食いがよい時はウキが沈む。ウキの引き方によってウグイかハエ（オイカワ）かわかる。ウグイはビコビコッと引き、ハエは横にチュチュッと引く。アユはまっすぐツツと引く。川の底でござそしているような鮎は狙っても食いがわるい。釣れたとき、よく食ったときの状態のアユをよく覚えていなければいけない。特にアユの色。アユは赤い色、青い色とか真っ青い色とか、泳いでいる鮎でも色がちがう。釣れたときのアユの色を見ておくこと。上から見ても大体わかる。

瀬は撒き餌が効きにくいので、一人で行くときには淵のようにすぐにジャコが流れないような溜まりで釣る。流れがあっても、瀬の縁にある溜まりのような所で釣る。エサ釣りを始めて、人並みに釣れるようになるまでに3年ほどかかった。エサは、ハエの浮袋やクラゲ、それからアユの舌でも食う。去年（2015年）のアユは大きかった。20～25cmぐらいあった。

天然物のアユかどうかは見たらわかる。天然の鮎は極端にいうと口がとがったような形だし、放流のアユは口に丸みがある。安田川も昔のアユのほうが香りがあった。昔は手でにぎったら生ぐさいようなアユ独特の匂いがしていた。アユが食べる餌がちがってきているのか、最近のアユは昔のような匂いがあまりしない。

昔の鉤は今のものより、もうちょっと大きかった。昔の人のエサはノレソレではなかった。年寄りから、昔

もジャコ（シラス）をまいて釣ったと聞いたが、それは今のように塩づけにしたものではない。海からあがったジャコをそのまま持って行って撒き餌にして使った。エサはジャコの眼玉に鉤をさして切らずに（一匹そのまま）流した。

安田川は満潮のときの潮は学校の前まで上がる。ここで釣るときには、込み潮のほうが釣れる。引き潮でも食わんことはないが。昔は川口（河口）でよく釣った。昔のように水が多いとアユが一気に川口に下がってきていたが、このごろは水量が少なくなったので、いっぺんにアユが河口に落ちてくることは少なくなった。

アユのなかには、遡上しないで河口付近に残ったままのものもいるが、それはあまり大きくならない。

9月になってエサ釣りが全地域で解禁になると、川の上から下へ下へアユがさがってくるのを追いかける。ある淵で釣れたからといって、同じ淵で毎日食うというものではない。まあ、一つの淵に100匹おるとしたら、そのうちエサで食う50を釣ったら、残っている50匹はおっても、なんぼジャコをまいても食わん。

大水が出たあとには、よその川のアユが入ることがある。安田川のアユより大きなアユがふえたといったときは、大体奈半利川のアユが入っている。奈半利川のアユはよく入る。地元のアユをジアユ（地鮎）という。

釣り場は毎年変わる。天然の鮎は海のもの食っているせいかどうか分からないが、天然の鮎の方が反応がよい。太い水（大水）が出たときにも、天然の鮎は朝から晩まで食うが、放流のアユは朝なら朝しか、その時間しか食わん。放流のアユは日が上るまでに釣らないといけない。養殖をしたアユは、決められた時間にエサを食ってきているからではないかと思う。

（2） 安田川中流の淵で釣る

2016年9月11日、松本さんの釣りに同行させてもらった。場所は、安田川の中流にあるジョウゾウノ淵である。松本さんは早朝に来て釣っていたが、筆者は都合で10時ごろに川原に着いた。筆者が着いてから、釣りを切り上げた午後3時までのあいだに50匹ほどの釣果があった。型の良いアユをつぎつぎに釣り上げていく松本さんの、エサ釣り漁の一端を紹介したい。

写真1・2

淵での釣りを得意とする松本さんが、今回の釣り場に選んだのはジョウゾウノ淵である。



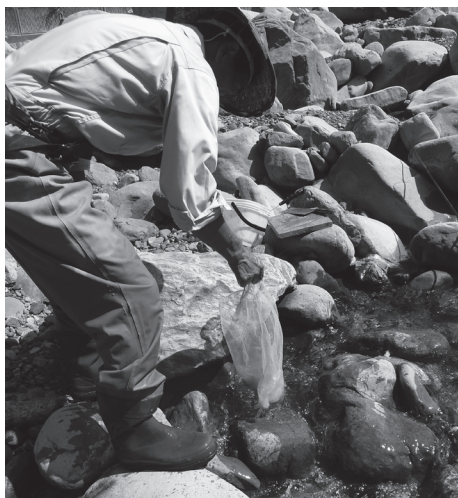
(1)



(2)

写真3

撒き餌のジャコ（シラス）はネットに入れて水に浸しておき、使うときに引き上げる。



(3)

写真4・5

俎板にのせ、包丁でジャコを細かく切る。写真5のそばには、撒き餌を入れる容器とジャコをすくってまくキャスター（撒き餌杓）が見える。



(4)



(5)

写真6

鉤にさすエサ（ノレソレ）は、飲料用の小さな容器のなかに入れて保管している。



(6)

写真7

組板の上にノレスレを伸ばしてならべる。



(7)

写真8

4、5匹ならべると、包丁で短く切っていく。



(8)

写真9

1cmたらずに切ったノレスレ。同じ長さになるように組板には等間隔の筋目が入れてある。



(9)

写真10・11

切ったノレスレは、平たい小さな石を濡らしてその上にのせる。ノレスレの乾燥を避けるため小石は岩の陰に置く。このとき、ハチが何度も飛んできた。エサのノレスレに砂糖を使っているためだろうか。



(10)



(11)

写真 12

切ったエサは、少量を左手の親指と人差し指の付け根にくっつけるようにのせて使う。無くなると、小石の上のエサを補充する。



(12)

写真 13

撒き餌とエサの道具一式。



(13)

写真 14・15・16

ジョウゾウノ淵で釣る松本さん (14)。掛かったアユを慎重に引き寄せる (15・16)



(14)



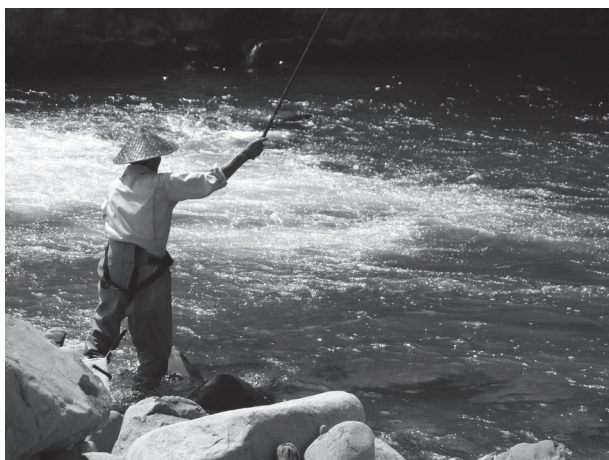
(15)



(16)

写真 17

淵の上の流れの早い場所に移動して釣る。



(17)

写真 18・19

釣り上げられて水面に姿を見せたアユ (18) と、鉤のかかった状態のアユ (19)。



(18)



(19)

写真 20

近くで友釣りをしていた人が、松本さんが釣ったアユを借りにきた。生きのよいアユを渡す。借りた人は、そのあと友釣りで釣ったアユをもって返しにきていた。



(20)

2. 野根川のエサ釣り—高知県東洋町・徳島県海陽町—

安田町の松本義嗣さんは淵での釣りが中心だが、一方で、流れのある瀬で釣るのを得意にしている人もいる。2016年9月10日に野根（高知県東洋町）を歩いた。バス停そばの朝市で、お茶を出してくれた女性に、アユのエサ釣りをしている人を知りませんかと尋ねると、知り合いの御主人に在るといって連絡をとってくれた。ちょうど今、野根川でエサ釣りをしているところだという。バスの便がないからと女性の車で釣っている場所まで送ってくれた。下流の瀬で釣っていたKさん（1951年生れ・男・東洋町在住）に話を聞くことができた。野根川は、高知県と徳島県の県境に位置する^{ひんでんまる}貧田丸（1019m）付近に源を発し、徳島県海陽町をへて高知県東洋町野根で土佐湾に注ぐ、延長約29kmの河川である。高知では、エサ釣り発祥の川と伝えられている。

（1）落ちてきたアユは海の潮を飲んでから川にもどる

Kさんがエサ釣りを始めたのは40歳のころからで、3、4歳年上の人から教えてもらったという。つぎの話は、野根川下流の川原で聞いたものである。

エサ（サシ餌）のノレソレは、塩をふって半日ぐらいしめてかたくする。そうして塩出ししたものを箆の上に並べて砂糖をまぶし、冷蔵庫に入れておく。こうすると腐りにくい。釣りに出るときは、必要な分をビンに入れて持参する。川原で組板の上に並べ、8mm～1cmほどの長さに切って使う。カブシ（撒き餌）にするシラスは塩出しをするが、塩がつよいと食わないし、また塩が抜け過ぎてもよくない。

竿は長さ5.3m、ハリスは0.4号を使っている。エサのノレソレは鉤にちょっと引っ掛けるようにさす。アユが食ったかどうかは、ウキで見る場合と手ごたえで判断する場合とがある。ときどき竿をしゃくるようにしてアユに誘いをかける。釣る場所は、もっぱら流れのあるところで、淵ではあまり釣らない。しかし、瀬がきつい（流れが速すぎる）とカブシが流れてしまって効かない。アユがいるときは、そこから逃げないようにカブシをタイミングよくまいていく。以前は、エサにイカを使う人もいたし、カブシには、アジの皮をとって三枚におろし、細かく刻んだものをまいていた。

釣る時間は朝夕が食いがよい。大きな水がでたあとで、川がにごっているときは、アユも人の動きが分からなくなるのかよく釣れる。流れが速いと、アユは川の中央にはいられないので、かたまって岸の方に寄っている。大水で落ちてきたアユは、一度海の潮を飲んでからまた川にもどる。

腹に子を持ちだすと、雨が降るごとに下がってくるので下で釣るようになる。メスが下がるとオスもついて下がる。落ちアユはかたまって（群れで）落ちてくる。天然のアユは放流のアユとちがって顔が細くて体がスマートなのでわかる。

（2）エサ釣りの古い姿を伝える

つぎに、野根川と安田川の両河川を中心にエサ釣りを経験してきた坂本正文さん（1933年生れ・男）の話を紹介したい。2016年3月8日の午後、安田川の河口付近を歩いていたとき、石に腰をかけて休んでいる老人を見かけた。声をかけて、アユのエサ釣りについて尋ねると、以前はよく釣ったものだという。さっそく、となりに座らせてもらい話を聞かせていただいた。坂本正文さんは、徳島県穴喰町船津（現、海陽町）の出身で、20歳過ぎまでこの地で暮らした。船津は野根川の上流に近い集落である。川漁が好きだった父の影響で、アユのエサ釣りは少年の頃から行っていた。その後、高知県の馬路村^{やなせ}魚梁瀬（安芸郡）で仕事をするようになり、それからは馬路村を流れる安田川の上流や中流でエサ釣りをしてきた。定年後は安田町に住むようになった。

たが、現在は釣りはしていないという。坂本さんの話には、船津と馬路の両方の体験が混在しているが、とくに船津での記憶はアユのエサ釣りの古い姿を留めている。

家のすぐ前が川（野根川）で、父親は、朝は目が覚めるとすぐに川に行くくらい川漁が好きだった。アユのエサ釣りもよくやっていて、エサ釣りは父親から覚えた。昔は竹の竿を使っていた。切ってきた竹を火であぶって油を抜き、何度も矯めて乾燥させたものを使った。竿に用いる竹はゴサンチクかハチクで、切るのは9月から10月、暦の^{つち}犯土でないと切る。犯土のときに切ると虫が入るなどという。ゴサンチクは竹の格好が良く、ハチクは強かった。竹間（^{たけま}節の間隔）が短い竹は弾力性があるが、竹間が長い竹は竿としてはあまり向いていない。

竹竿は2.5m ぐらいのものだった。糸（ハリス）は、子供の頃はお婆やお爺の目を盗んで、家で飼っている蚕（4～5cm くらい）を二つほどさっと取って、頭を折って、それを引っ張り抜くと透明の糸がとれる、それを使った。早く引っ張るか、遅うに（ゆっくり）引っ張るかで糸の太さがちがってくる。太くしようと思ったらゆっくり引っ張る。その糸に鉤を結んだ。糸はなかなか強かった。釣り鉤は宍喰の町に出たときに買ってきた、カエシの無い鉤を使った。錘は昔は殺生人（獵師）が持っていた鉄砲の玉の鉛を使ったこともある（船津での体験）。

カブシ（撒き餌）は、塩をしていないシラスを包丁でたたいて細かくして、それをちょっと丸めて放る。船津にいたときは、シラスが手に入らなかったで、乾燥したジャコを口で噛んでそれをカブシにしたが、口が荒れた。エサも噛んでやわらかしたジャコを使ったが、最初の一匹を釣るとそれからアユの舌を切って鉤にさして釣った。エサのシラスはすぐに鉤からはずれるが舌はなかなかはずれない。天気はカンカン照りよりも曇ったときがよい、時間は朝はやく釣るのが一番。アユのかたまっているところを追いかけてカブシをしてつけて（居続けるようにして）釣っていた。

上流のほうでは、エサ釣りは秋小口のアユが下がるかという時分に釣ったもので、あまり早くは食わなかった。食っても数が少なかった。どういう関係か、落ちアユのころになったらアユは食いがよい。馬路の方でも釣ったし、川の奥の方（上流）でも釣れるが、しかし、本当によく釣れるのは川下だ。竿は釣る人の好みだが、自分は先調子のものが使いやすかった。アユも無理に引き上げると口が切れることがある。

深場（淵）はカブシを食うためにアユが上ってこなければならないので、カブシをうまいことまいていくと浅場の方が食いはよい。浅場はカブシをするとすぐに食う。流れでウキがちょっと止まったとたん合やす、ウキが沈んで合やすようではもうおそい。昔はウキは手製だったが、軽い方がよいといって桐で作った。また、ウキ無しでも釣ったが、その場合は、流しているとツッと糸が止まるときがある、止まると見たら竿を上げる。糸は張ったままずっと流していき、竿の先だけさっと上げる。竿は大きくふらない。

今は釣ったアユをタモですくうが、昔は手でつかんでいた。釣り方が変わった。昔はジャコを口で噛んでそれを吹いてカブシにしていた。口の中がねばねばするので川の水を口に含みながらやった。竿がグラスファイバーになっても、最初のうちは慣れた竹竿が釣りやすかった。

水は、ちょっと濁っているぐらいがよい。にぎりすぎると食わない。大水のあとは、アユが餓えて腹をへらしているので一時は食いがよくなる。

3. 久礼川のエサ釣り—高知県中土佐町—

高岡郡中土佐町を流れる久礼川は、源を同町禰山（842m）に発し、狭流をなして南東に流れ久礼湾に注いでいる。流路延長 9.4Km、流域面積 40.96Km²の小さな河川だが、アユ、ウナギ、ハゼ、ウグイなどが生息している〔高知県 2012〕。筆者（常光徹・1948 年生れ・男）は、小学校 5 年生頃から高校時代まで（1959～66 年）、夏の遊びのひとつとしてこの川の下流域でアユのエサ釣りを行なっていた。以下は筆者の体験である。

（1）久礼川のアユ釣り

河口から 1km ほど遡ったところにベンガ淵と呼ばれる淵があり、この付近までは感潮域で潮の満ち引きの影響を受ける。河口付近では当然のことながら、川幅や水の深さがかなり変化をする。今日、アユ釣りといえば友釣りが広く知られているが、久礼川は河川延長が短く、鮎も全長で 3、4 寸（約 9～12cm）ほどの小型が主で、縄張りをつくらないためであろうか、筆者の知る限り友釣りの姿を見かけたことはない。もっぱら毛バリ釣りがエサ釣りである。毎年、解禁日の 6 月 1 日には、釣り好きの大人たちは日の出とともに、河口から 0.5Km ほど上流にある通称大柳おおやなぎと呼ぶ場所の岸に陣取って毛バリ釣りを始める。ここは、水の流れが緩やかで深みになって毛バリ釣りに適していたようだ。この釣りを行うのはもっぱら大人で子どもは参加しなかった。継竿の用意や毛バリの種類を揃えるのに費用がかかるだけでなく、天候やアユの反応見て毛バリを取り変えるなど知識や技術的な面でも子どもにはむづかしい釣りだといってよい。釣り人はそれぞれが、竿、毛バリ、魚籠などに工夫を凝らしたものを使用し、時々、釣りの合間に道具談義をしている場面を見かけた。今振り返ると道楽的な要素のつよい釣りだったように思う。

一方、エサ釣りは仕掛けが比較的簡単で子どもでも参加することができ、釣期も解禁から秋まで楽しめた。アユをエサで釣る漁法は各地で行なわれており静岡県得天竜川などエサ釣りの盛んな川もあるが、ただ、友釣りのようにシーズン中に話題にのぼることは少ない。現在は、エサ釣り用の仕掛けがセットで売られていて、コマセをつける螺旋なども開発されているそうだが、筆者の時代には釣具屋にもこのような釣り道具は販売されておらず、仕掛けはそれぞれが用意をした。エサ釣りが行なわれている河川やその具体的な仕掛けなどについては、今後、現地調査や文献資料の分析を進めねばならないが、おそらく、アユのエサ釣りは汽水域を含む河口付近でさかんな漁法ではないかと思われる。ここでは、1960 年代の前半に筆者が行なっていた久礼川でのエサ釣りを報告する。

（2）汽水域のエサ釣り

竿は長さ 2.5m 前後の竹竿だったが、できるだけ軟調でしかも腰のあるものがよい。かたい竿は、アユのかかりが悪いと釣り上げたときに口が切れて逃がすことがたまにあり、また、竿がしなやかな方が引きを楽しむことができる。鉤は釣具屋では買わずに、アユ釣りを趣味にしている釣り具を自分で作っている人のところに行って有料（1 個 5 円）で分けてもらった。カエシのないごく小さな鉤で、釣り具屋で売っているものよりもさらに細くて繊細にできていて久礼川の小アユを釣るのに適していた。鉤の材質は不明だが、楽器の金属弦で作っていると聞いたことがある。錘は使い終わった絵の具のチューブ（鉛）をとっておき、薄く伸ばしたものをハサミで小さく三角形に切ってハリスに巻きつけた。ウキは小刀で木片を削り自分で作った。長さ 2.5cm ほどだが、仕掛けが軽量で小アユが対象のため小さいウキのほうが敏感に反応する。鉤には 3 毛（0.3 号）のハリスを結んだが、糸が切れたときのために予備を作っておく。用意した仕掛けや予備の鉤、和鋏などは小さな

木箱に入れる。この釣り具を入れる木箱はわが家にあった。祖父か父が使っていたものではないかと思う。中が細かく仕切られていて仕掛けなどをいれるのに都合よくできていた。

ここまで準備ができるとエサにする魚を買いに大正町に行く。大正町は漁師がその日に獲ってきた魚貝類を売っている市場で新鮮な魚が安く手にはいる。エサに用いるのは白身の魚である。小遣いで買うので高い魚は買えない。アジかカマス⁽¹⁾を2、3匹買う。エサが手に入ると、竿とブリキ製の丸いズック魚籠、エサのアジ（カマス）、釣り具を入れた木箱を持って川に行く。

川原に着くと釣る場所を決めて竿に仕掛けを取り付ける。ベルトの左の腰のほうに魚籠の先のひもを結び、右の腰には木箱を下げた。まず、エサのアジの頭と内臓を取り除き水でよくすすぐ。内臓が残っているとカブシ（撒き餌）にするために噛んだとき口に苦味が残る。釣る場所は河口から1kmほど上流のベンガ淵までの間、つまり、潮の干満の影響をうける汽水域である。ベンガ淵より上に行くとい味が落ちるといわれエサ釣りはほとんどこれより下だった。

筆者は、流れのある浅瀬を選んで釣ることが多かった。エサのアジは頭を取ったところから皮を少し剥いで身の部分をいくらか噛み切る。つぎに、小さく噛み砕いたアジの身を舌さき⁽²⁾にのせて指先にとり、米粒大のエサを鉤につける。口の中の身はコマセとして狙いをつけたところにプーッと吹きかけ、そこにエサをつけた鉤を投げ入れる。コマセに集まってきたアユが鉤のエサにも食いついてくる。コマセはそのまま吹くことが多かったが、ときどき川の水を掌にすくい取って口に含んで吹いた。そうするとコマセが広い範囲に飛ぶ。また、ねばねばした口の中がすっきりする効果もあった。コマセを吹く回数や間隔はそのときの釣れ具合によって異なる。

ウキの位置は瀬の深さによって調整する。鉤にカエシがないので道糸はたるませないようにし、ウキが沈むと同時に竿をもつ手首をクッとしめるような感じで反応する。瀬を流れるウキはアユが食った瞬間、真下に沈むというよりも斜め下にキュッと引きこまれることが多い。ウキの動きとタイミングを合わせるために、糸を流すときは竿を持つ右手は肩よりもすこし高いぐらいのところ⁽³⁾で構えてたるみを少なくした。鉤のエサは一匹釣るごとに新しくつけるが、皮にちかくて外れにくい部分だと一度つけたエサで数回釣れることもある。

アユを釣り上げると腰から吊りさげている魚籠にいれる。水の入った魚籠のなかで泳ぎまわる鮎⁽⁴⁾の数がふえていくのが楽しい。ただ、同じ場所で釣り続けることはめったになく、食いが止まると移動をするのでその間にほとんど死んでしまう。よく釣れる時間帯は早朝と日暮れ時だといわれる。筆者は早朝の経験はとぼしいので何とも言えないが、かんかん照りの昼間よりも、夕暮れが近づいて川面に陰りがさすような時間帯に食いがよくなるのは経験的に頷ける。夕暮れ時に釣果をのばして、昼間の不漁をばん回した思い出は少なくない。台風などの大雨で川が増水したあともよく釣れる。大雨の直後はとても釣りのできる状態ではないが、3、4日して水が引いた後は面白いように釣れることがある。その原因はよくわからないが、大水で川底の石が流されたり裏返ってアユが食うコケが乏しくなるためではないかと言われていた。現在は新しい橋ができて無くなった⁽⁵⁾が、筆者が通っていたころは、久礼川の河口から300mほど上に沈下橋があった。中学生のとき、台風の後でこの橋の上から120匹ほど釣った経験がある。沈下橋なので水面との距離が近く、カブシを吹くと群がりくるアユの動きが見えて入れ食い状態であった。午後の数時間の釣りだったが、こうした体験をするとしばらくやみつきになる。

筆者が久礼川でエサ釣りを行っていた当時は、コマセは口で噛んで吹くのが普通だったが、一度だけ、白身の魚を搥った撒き餌をバケツに入れて、柄杓のようなものでまきながら釣っているのを見たことがある。その人は、流れのゆるやかな深みで釣っていたが、筆者が瀬で釣っていたアユよりも大きな型があがっていた。1960年代前半に久礼川で行なっていたエサ釣りを中心に報告した〔常光 2014〕⁽¹⁾。

4. 新莊川のエサ釣り—高知県須崎市—

新莊川は高岡郡津野町の鶴松森（1100m）に源を発し、須崎市を流れて土佐湾に注ぐ流路約 24km の河川である。高知県西部の川の中では勾配が急で、アユのエサ釣りも盛んである。須崎市に住む筆者の友人に、新莊川でエサ釣りをされる市川誠郎さん（1939 年生れ・男・須崎市在住）を紹介してもらい、2016 年 2 月 22 日に御自宅を訪ねて話を聞かせていただいた。市川さんの釣り場は主に新莊川の下流で、河口（汽水域）でもよく釣るという。

（1）潮に乗って上り下りするアユ

アユ漁の解禁は 5 月 15 日だが、エサ釣りは 7 月 1 日から解禁。終了は 10 月 15 日で、網も友釣りもすべてが禁漁となる。6 年ほど前までは 11 月 15 日から再び解禁だったが、資源を守るために秋の漁は止めた。子供は自由にどんな捕り方をしてもいいようにして、川に親しませることが必要だと思う。そうしないと、私たちの時代が終わったらアユのエサ釣りをする人は、ほとんどいなくなるのではないかと。

子供のときから釣りは好きだったが、エサ釣りを始めたのは高校をでてからで、昭和 32、3 年の頃から。今のアユは放流もので釣りやすいが、昔の天然物のアユはむつかしかった。7 月に釣るのは 16 ～ 17cm で 20cm にはなっていないが、10 月近くになると 20cm を超えている。天然ものは太りがわるい、大きくても 22 ～ 23cm だが、放流もんは 28 ～ 30cm になるものがある。新莊川は小さな川だがアユは太い。去年（2015 年）9 月に初めて尺のアユを釣った。台風で仁淀川かどこかのアユが入ったのではないだろうか。

釣り始めた頃は、竹竿で釣る人とグラスファイバーの人と両方いた。今はエサにノレソレをつかっているが、2 年前まではエサ（さし餌）もカブセ（撒き餌）もシラスをつかっていた。みんなノレソレに変わって、最後までシラスをさすのは私だけだった。シラスは一回ごとにはずれるが、ノレソレはしばらく釣れる。鉤はカエシのあるのとないのがあるが、あるほうをつかう。ハリスは 0.2 号から 0.4 号。シラスは半分に切って頭の方を鉤にさす。ウキは買ってきたものを自分でさらに小さくしてつかう。シラスのエサは合せを早くしないとすぐに無くなる。シラスのタイミングで合わせるとノレソレの場合はアユが食いこんでいないときがある。

釣るのは瀬で、流れのないところではあまり釣らない。瀬はカブセが流れるので、ほかの人がいるときには 5m ぐらいは間をあける。その日にもよるが、朝と夕方がよい。それに、込み潮の時に食いがよい、潮に乗ってアユが上ってくる。満潮で潮が止まったら食わん、潮が動かなくなったらなぜか食いがわるい。八分目ぐらいのとき、満潮を 10 とすれば 7 か 8 ぐらいのときが良いような気がする。引き潮は途中から流れが速くなるのでアユもすぐに下りる。どこまで下りているのかは分からないが、潮に乗って上って来てはまたいぬる（下がる）というように、上り下りするアユがいる。^{しも}下（河口）で釣っていると、自分の前にいたアユがこみ潮に乗っていなくなることがある。^{かみ}上のアユは（干満の影響を受けないところのアユは）そんなことはない。その日の潮（干満）を調べて釣りに行くことも多い。

大時化で他の川から太いアユが入ってくることがある。これをイリアイ（入り鮎）という。^{(2) しんてん}新田（津野町・四万十川の上流）に行つてエサ釣りをしたこともある。ここのアユは大きい。台風の後には、腹をすかしているのかよく釣れる。何日かして水が引くのを待って釣るが、その間に、それぞれがアユのかたまりそうな（群れていそうな）所を見つけておいて入る。慣れている人は、この程度の出水だったら、アユはあそこにたまるということを知っている。ちょっと濁っているときがよい。秋に食いがよいのは、タンパク質が欲しくなるのかもしれない。昔にくらべたら海から稚魚が上ってくる数がかなり減った。

5. 海部川のエサ釣り—徳島県海陽町—

海部川は徳島県海陽町を流れる河川。高知県境に近い湯桶丸^{ゆとうまる}（1372m）に源を発し、南東に流れて太平洋に注ぐ流路約36kmの川である。2017年11月1日、アユのエサ釣りに用いるシラスなどを売っているという甲浦^{かんのうら}（高知県東洋町）の釣具店を訪ねたが、あいにく店が閉まっていた。そこで、近くの白浜海岸に出たところ、浜の休憩台に男性が三人すわって何やら話しているのが目に留まった。私も休憩台に座り軽い世間話を交わすうちに、アユのエサ釣りについて聞いてみた。すると、一人の男性が、数年前まで海部川でエサ釣りをしていたという。それが、平岡順さん（1941年生れ・男・東洋町在住）だった。一緒に居た男性も、アユ釣りなら平岡さんに聞くのが一番だという。さっそく、話をうかがった。東洋町は、海部川が流れる海陽町の隣町である。

（1）河口で落ちアユを釣る

アユのエサ釣りは中学生のときからやり始めた。エサ（サシ餌）もカブシ（撒き餌）もシラスをつかった。アユがハエテクル（食いが立つ）とアユの舌をとって鉤にさす。舌の色は白っぽい。舌は鉤からはずれにくいので、一つで何十匹と釣れる。シラスをつけると一匹釣るたびにエサをつける。ただし、舌はシラスにくらべると食いが長い時間つづかないので、再びシラスに替えて釣ったりする。背中から太陽があたるときは、ハエテイルアユが浮いてくのが見える。正面に太陽があるとアユもウキも見づらい。

チモト（ハリス）は2毛（0.2号）、道糸は6毛（0.6号）だった。鉤はカエシのないものをつかった。あってもヤスリですって取った。エサのつけ方は、シラスを一匹そのままつけたり、頭を取って胴のところをつけたりという。大きなものを一匹そのままさすと掛かりがわるい。シラスは尻尾からは鉤にさせない。シラスの場合、強い風がふくとそれでエサがはずれたりする。取れたての新しいシラスは多少かたいし、塩づけしたものより食いがよい。アユは唇がかたいのでしっかり掛かったらめったにははずれない。

ウキは桐で作ったものを買ってきて、それを自分が見やすい黒色に塗かえた。ウキは水面からちょっと出ていけばよい、出ても2cmぐらい。アユが食ったときのウキの変化は流れの早さによってもちがう。ウキは10個ぐらい持っていて、瀬で釣るときとトロ場で釣るとき、また逆光のときなどにウキを替えるが、それは自分が見やすい形のものに替えればよい。瀬ではウキの流れを止めながら釣ると、水の抵抗でウキが隠れた瞬間に食うことがあるが、それは手先の感触でわかる。瀬で釣る場合、糸はたるまないように張っている。

最近エサ釣りする人が減った。撒き餌のシラスも高い。上手な人は撒き餌を切らさないようにまいて、自分の前にアユをつけている（居続けるようにしている）。カブシのまきかたはその時の流れにもよるが、ウキを入れるすこし上^{かみ}にまく。エサは沈んでいくカブシよりよりちょっと浅い目にいくようにしたらよいが、それはその時の感による。イカで釣る人もいた。一時アカアミ（アミエビ）を撒き餌に使うこともあったが禁止になった。以前は、生のゼイゴ（小アジ）の腹の身を指で小さくちぎってエサにしたり、アジの皮をはいだものを口で噛んでプツと吹き、カブセにする人もいた。アジを俎板で切る人もいた。

9月の末から10月ぐらいには、落ちアユをねらって、海部川は高知県の連中が入って、川の両脇へずーと並んで、そりゃ見事なものだった。鉄砲水が出るとアユは流されて河口に来る。一投ごとに食うので、昔、10月ごろだったと思うが、一日で10リットルのクーラーにいくつも釣ったことがある。海南の釣具屋のおじさんが来て、クーラーを見て「こりゃ、もう入らんやないか」と言って、新しいクーラーを持ってきてくれた。場所は、海部川に行くとわかるが、旧の橋（海部川橋）がある、そのちょっと下がったところやった。そこは、

満潮のときは潮が入って流れがとろう（ゆるく）なる。

群れをつかまえたら、カブシを上手にやって目の前につけた者が勝ち。そんな時は小用にちょっと場所を外したら、知らん者に（その場所に）すっと入られる。アユも食いだしたら川の上側（水面近く）に浮いてきて、川の色が変わるぐらいになる。日がちょっと傾いてきたぐらいのときに、一番よう食た気がする。

大水で河口に落ちてきたアユは、また登って（遡上して）いくことがあるが、6月のアユのように上流までは行かない。途中で止まる。すぐに落ちアユになって下りてこないといけないので。落ちアユを釣るときは、川の両側から向き合って釣るが、昔はアユの多い年はずーっと並んでいた。最近はアユが少ないので、そんなことはないと思う。この頃は目がとうろになった（視力が落ちた）のでエサ釣りもやめた。

エサ釣りは河口が多いね。上流に行ってエサ釣りをしていたら、友掛けの人に怒られたことがある。

落ちアユを釣る良い場所をとるため、朝は暗がりから行った。夜が明けて行っても入るところがない。釣り人が大勢いるときは、人と人のあいだは竿一本分あけるのがルールとしたものだが、一人が釣れだすとまわりがずんずん攻め込んでくる（近づいてくる）。予備の竿も持ってないといけない。竿と竿があたると竿先が折れる。混んでいて隣に人がいるときは、仕掛けも少し短くして竿も真上から投げ入れるように振る。普段は糸は竿尻から一尋あまり長くしていた。その分だけ広くさぐれるから。カブシのシラスを叩く（切る）ときが休憩時間になる。

河口で潮がこんでくるときでも、ウキは少しずつ下に流れていくが、カブシもほとんど流されずに効くのでアユが多いときは釣りやすい。早く自分の前に群れをつけることが大事。（エサ釣りは）野根川、海部川が一番歴史が古いね。海部川で釣るのは高知の人ばかりだった。徳島県の人にはエサ釣りはあまりしない。友釣りもするので吉野川の上流にも行ったことがあるが、そこでエサ釣りをしているのは見たことがない。

大水が出たあとは食いがよいが、赤土にごりといって川が赤くなったときはまったくだめである。にごり具合による。

昔は、竹の一本竿で釣ったこともある。竹は自分で切ってくる。火であぶって伸ばして、日陰に一年干して次の年につかう。竿にする竹はハチクで、しかも先のやわらかいものがよい。しなる竿はスナップだけでスツととぶ。今のようなナイロン糸のない時代には、道糸はヤンマ（細い麻ひも）で、下のチモト（ハリス）は人造テグスというて透明感のない、長いあいだ水に浸けておくと溶けていくやつだった。

野根川か海部川のアユかわからんが、大水で海にでたアユがこの港（甲浦）に群れで入ってきたことがある。それから、野根の手間にあるアイマという小さい川があるが、そこに太いアユがものすごく入ったことがあってタマですくに行行った。

川下にずっと居ついて上に登らないアユは太らん（大きくならない）。海部川のアユは野根川のアユより一回り太い。

（2） 落ちアユがない

6月1日解禁の海部川のアユ漁は10月19日までで、10月20日から禁漁になる。12月1日に再び解禁になり、それから31日までが落ちアユ釣りの最後の機会である。河口付近でエサ釣りが見られるというので、筆者は2017年12月2日に現地を訪ねた。ところが、土曜日にもかかわらず川に釣り人がまったくいない。やっと見つけたのは、河口の近くに流れ込んでいる支流の一つ母川でエサ釣りをしている数人の男性。声をかけると、同じ釣り仲間で全員高知から来ていた（写真21）。今年は、理由はわからないが海部川（本流）に落ちアユの姿がまったく見えない。毎年来ているがこんな年は初めてだという。ぽつぽつ釣れていたが、母川に居ついて

いるアユであろうか、型は小さい。実は、前夜（12月1日）、海部川近くの食堂に入ったとき、海釣りが好きだという店の主人に落ちアユのことを聞いてみた。主人が言うには、今年は落ちアユはいないだろうという。そのわけを尋ねると、川に鳥がほとんどいないからとのこと。例年だと落ちアユを狙ってカワウやシラサギが集まるが、それを見かけないと話してくれた。主人の言ったことは当たっていた。

海部川漁業協同組合の浦上家吉さん（1946年生れ）の話では、例年だと、この時期の落ちアユは主に新海部川橋より下で釣る人が多いという。海部川河口には二つの橋がある。海岸線から1.2kmほど入ったところに海部川橋があり、そこから600mほど上流に新しくできた新海部川橋がある。地元では新旧で使い分けている。満潮のときには新海部川橋の辺りまでは潮が入るという。先に紹介した平岡順さんが、かつて落ちアユをクーラーにいくつも釣ったのは、海部川橋の下手（写真22）なので、海に近いまさに汽水域での落ちアユ釣りである。

写真 21・22

21は、母川でのエサ釣り。全員高知から来たという。

22は、海部川橋から海の方を見る。



(21)



(22)

まとめ—若干の考察—

（1）江戸時代から続くアユのエサ釣り

秋の出水をきっかけに川を下った親アユは、下流の瀬で産卵したあと1年という短い一生を終える。ふ化した仔アユは流れに乗って海に出る。海では主に波打ち際付近を生活の場として、動物性プランクトンを食べているという。高橋勇夫・東健著作『天然アユの本』では「盲点となっていた波打ち際」という小見出しでつぎのように述べている。

1982年、土佐湾に面した砂浜の波打ち際（碎波帯）にアユの子がたくさん集まっていることを、木下泉さん（高知大学）が魚類学会で発表した。盲点というべきだろうか。アユがたくさんいた場所は、それまで調べられていた沖合ではなく、船では入ることすらできない岸沿いの波打ち際だった。木下泉さんは、

アユが波打ち際に現れる期間やサイズなどについて明らかにした〔高橋他 2016〕。

この発見をきっかけに、各地で調査が行われ、波打ち際のような浅場がアユの成育場になっていることが裏付けられたという。アユの子が波打ち際に集まる記述から、筆者は『真覚寺日記』のある記事を思いだした。この日記は、宇佐村真覚寺（現、高知県土佐市宇佐町）の住職だった井上静照^{じょうしょう}が、安政南海地震（1854年）を機に筆を起し、明治元年（1868年）まで書き記した日記である。その安政4年（1857）1月15日条に「一両日已然より橋田ノ濱波打際ニ鮎子集り網を以引ク壺斗式斗より四五斗も引もの有」と見える〔井上 1972〕。橋田ノ濱（宇佐町橋田）の波打ち際に集まる鮎子を、網を引いて何斗も取ったという記事である。安政4年1月15日は太陽暦では1857年2月9日にあたる。近くを流れる仁淀川へ遡上する前の小アユであろうか。この記事だけでは具体的なことは分からないが、波打ち際に群れる鮎子は時に漁の対象であったようだ。永澤正好『四万十川Ⅱ 川行き（田辺竹治翁聞書）』には「鮎子^{あいこ}は海にうんとおって、昔は浜の人らあが地引き網でとりよつと。蚊帳の目みたいな細い網で、ちょっと太って鮎の形になった小鮎^{こあい}を引きよつた。よけ引きよつた年は鮎が少ないということよ。鮎子は干してじゃこにしちよつた。ちょっと苦味がささあね」と見える〔永澤 2006〕。『真覚寺日記』の記事も、春先の浜の小アユ漁の一齣であろう。また、秋道智彌『アユと日本人』にも、波打ち際での稚アユ漁が紹介されている。

鹿児島県垂水市^{ふたがわ}二川では、春、二～三月、鹿児島湾の砂地の海岸にあつまってくる稚アユをエゴアミというすくい網ですくってとる。エゴというのは、稚アユのことである。このすくい網は、網の部分が八〇センチ四方^{くけい}くらいの矩形をしており、竹竿の部分を入れると全長が五メートルもある。網目は五ミリ四方くらいで、網の中央部分にはガーゼをひいてある〔秋道 1992〕。

このように述べて、すくい網の図を載せている。エゴは鮎子の訛音であろうか。春、河口（汽水域）に入る前の、波打ち際に群れる小アユを獲っていたことがわかる。ただ、現在は、こうした漁法でむやみに稚魚をとって資源を枯渇させることのないように配慮されており、許可制や漁法の規制等が設けられている。

また、近年の研究では「海に出ないで河口の汽水域（淡水と海水が混じる場所）に留まって、そこで成長するアユの子がたくさんいることもわかってきた」という〔高橋他 2016〕。汽水域がアユの成育場として重要な役割を果たしているというのも興味深い。

アユのエサ釣りは、高知県下でもとくに東部の河川が盛んである。聞き書きをしているあいだに何人かの釣り人から、アユのエサ釣りは野根川から始まった、とか、野根川のエサ釣りが古い、という話を耳にした。どうも、そうした意識があるようだ。しかし、それにまつわる言い伝えを尋ねても、知っている人はいなかった。発祥の地を探求する作業は筆者には荷が重い、ただ、野根川では、江戸期からアユのエサ釣りが行なわれていたことはまちがいない。高知県立図書館が所蔵する『世用日記二附昔噺聞書』に「安永三午歳奈半利浦役吉松丑右衛門鮎釣り初ル此人野根ニ勤ノ内釣ヲホヘタル也但餌白ザコを以也」とある。安永3年は西暦では1774年。浦役人の吉松丑右衛門が、勤務地の野根で白ザコを餌にする鮎釣りをおぼえたという記事である。白ザコはシラスであろう。エサ釣りの記録として興味深い、しかし、白ザコを手に入れることができたとしても、エサ釣りに適した小さな鉤がないことには実現しない。この点について、広谷喜十郎は「土佐河川漁業史考」で、土佐で早くから鮎の蚊釣針が発達したことに触れて、つぎのように述べている。

高知城下町菜園場には「丹吉釣針」で著名な老舗の広瀬丹吉商店がある。天明元年に初代が釣針や漁具などの製造を本格的にはじめてから店をかまえたという。このように城下町に専門の釣針製造の店屋ができたのは、それだけ海や川での釣りが盛んになったことを意味する。前述のように、鏡川での鮎のかけ釣りが文政年間からはじまったといわれるから、土佐での川漁は一八世紀末頃から飛躍的な発展をとげるようになったと思われる〔広谷 1986〕。

以上のように述べて、吉松丑右衛門の話を紹介している。釣り人が野根のエサ釣りは古いと語るその理由は、今日では判然としないが何らかの伝承の根拠があったと考えられる。

高知県の河川は流程が短くて急流の河川が多い。谷口順彦は「土佐の河川の特徴」で、平均（河道）勾配について「物部川、新庄川、野根川、安田川で大きく、0.020 以上、その他の川ではそれらの中間的勾配となる。高知県東部河川は一般的に勾配が大きく、西部の河川で、小さい」と報告している〔谷口 1989〕。この指摘にあるように、主に県東部の中型河川は、川の勾配がかなり急なだけに、大水が出るとアユは一気に流下し、落ちてきたアユが河口（汽水域）付近に群をなしてたまることが多く、それがエサ釣りにとって恰好の対象になる。こうした条件とともに、川の深浅や地形など、多くの釣り人が竿をならべて釣ることができる自然の環境に恵まれている河川が、エサ釣りの川として知られる野根川や海部川なのであろう。

（2） 釣り具とエサの諸相

エサ釣りに用いる釣道具やさし餌、撒き餌などは釣る人の好みによって一様でない。それでも、聞き書きをもとに、昭和から平成にかけての釣法の変化をある程度読み取ることが可能である。

竿はグラスファイバー製が登場するまでは竹の一本竿だった。秋に切った竹を炙り油を抜いて矯める、これを何度も繰り返したものを陰干しにして翌年つかったという。竹はハチクが多かったようで、節の間隔が短くてしなる竹がよいとされた。坂本正文さんによれば、切る時期は9月か10月だが、^{つち}犯土の間は避けたという。犯土は、^{かのえうま}庚午の日から^{ひのえね}丙子までの七日間を^{おおつち}大犯土、一日おいて^{つちのえとら}戊寅の日から^{きのえさる}甲申までの七日間を^{こつち}小犯土といい、この間は、穴掘りや伐木などを忌む。犯土の期間に伐採した竹木は腐りやすいという言い伝えがある〔岡田 2006〕。暦の知識が民間に広く浸透し、庶民が日常の行動を判断する際の目安になっていたことがうかがえる。竿の良し悪しは、釣果だけでなく、引きの手ごたえを味わう重要な道具だけに、竹を切る時期や吉凶には一段と気を使ったようだ。和歌山県那智勝浦町の太田川河口でシロウオ漁を行っている下地收さん（1941年生れ）は、竹は9月から10月の闇夜に切る。そうすると虫が入りにくい、と話されていた。

エサ釣りの鉤は釣具店で購入するが、以前は手先の器用な人は自分で作ったりしていた。現在のようにないもかも釣具店で調えるわけではなく、ウキは桐の木で、錘も獵師の鉄砲玉（鉛）を利用するなどして、自分で作るのがむしろ普通だった。釣糸は、人造テグスやナイロン系の糸が登場する前は、平岡順さんの話のように道糸にはヤンマ（細い麻ひも）などを使ったのであろう。鉤を結ぶハリスについても早くから^{てぐす}天蚕糸などが知られているが、今回、坂本正文さんが子供の頃にやっていたという、カイコの頭を折って引き抜いた糸をつかったというのは初めて知った。筆者には、それがどういう性質の糸なのか判断できないので、発言は控えねばならないが、庶民が天蚕糸を購入できない場合などに、生活の知恵として伝承されていたのであれば興味ぶかい。また、昔は馬の尻尾の毛を抜いて鉤に結んだようだ、と話してくれた人もいた。

現在、さし餌はノレソレ、撒き餌にはシラスを用いるのが一般的といってよい。ノレソレは塩と砂糖をまぶして加工したものを冷凍しておき、必要に応じてつかう。撒き餌のシラスは塩づけしたものを利用することが

多く、つかう前に塩出しをする。ノレソレが登場したのは、それほど古くはないようで、依光良三は「土佐の
アユ 今昔」でつぎのように述べている。

ノレソレに到達するまでの餌の歴史は、最も古典的な生のシラス（ドロメ）から始まって、それに似せた
イカの細切りが多く使われだし、のほりこ（ごりの稚魚）が使われた時期もあったが、昭和40年代後半
からはノレソレが餌の主役の座につき、シラスやイカが脇役に回った。アナゴやウツボなどの稚魚といわ
れるノレソレは、適度に切ってさし餌にすると、寄せ餌にするシラスとほとんど変わらない透明度とかた
ちを保ち、アユの吸いこみが良く、しかも餌持ちが抜群で、餌釣りにとってこれ以上望めないエサとなっ
た〔依光1989〕。

アユのエサ釣りに用いる鉤は実に繊細で小さい。市販されているチカ鉤3号ぐらいを使う人が多いようだが、
昔の鉤はもうすこし大きかったという話を何人かから聞いた。おそらく、現在のものよりやや大きめの鉤に生
シラスを一匹つけたのではないかと思う。生シラスの方が塩づけのものよりいくらか餌の持ちがよいという。
依光がノレソレのさし餌は「寄せ餌にするシラスとほとんど変わらない透明度とかたちを保ち」と指摘するよ
うに、さし餌は撒き餌と同じであるか、そうでなければ撒き餌に色や形が近いほどよい。この点については、
松本義嗣さんがさし餌のつくり方について「撒き餌をまいたときに、ジャコ（シラス）の色とノレソレの色が
同じ状態で流れる色にこしらえるのがむづかしい」「ジャコの色とノレソレの色が同じ状態にならないと食
いがよくない」と言っていたことを想起させる。ノレソレがさし餌としてすぐれた条件を備えた素材であるこ
とは間違いないが、それをさらに、撒き餌が流れる状態に近づけるエサづくりの工夫が釣り師の隠れた努力で
あり技術といってよい。アユの食いが立っているときは目立たなくても、そうではない状態のときにはエサの
微妙なちがいが物を言うのであろう。

ノレソレが普及する以前には、シラス・アジ・イカなど白身の海魚が主にさし餌としてつかわれた。筆者は
少年時代にアジの身をエサにしてアユ釣りを行なったが、鉤からすぐにはずれるのが面倒だった。そこでアジ
が白くふやけてくると、皮に近い部分をちぎって鉤にさした。このほうが餌持ちがよいからだ。さし餌の進化
の背景には、いかに餌持ちをよくするかという釣り人の関心が常に働いている。海魚ではなくアユの舌をつか
う場合もある。アユがアユを食うというのも意外だが、平岡順さんによれば、舌は餌持ちがよいがシラスのよ
うには食いがつづかないという。それでも、食いが立った状態のときや、簡単にシラスが手に入らない所など
では、アユの舌は重宝されたであろう。

撒き餌にシラスをつかうのは昔も今も変わらないが、ただ、以前は生シラスをつかうことが多かったようだ。
生シラスの方が塩づけのものより食いが良いという。現在は、釣りの途中で撒き餌が切れると、川に浸してあ
るシラスを入れたネットを上げ、適量をまな板のうえで叩くように細かく切り、餌箱に移す。それをキャスター
（撒き餌杓）ですくってまくが、坂本正文さんの若い頃は、生シラスを包丁でたたいて細かくしたものを（手で）
丸めて放った^{ほう}という。川に包丁と俵板を持参するようになった時期は定かでないが、包丁で細かく切ったシラ
スをキャスターでまいた方が、狙ったところに届きやすく、撒き餌としての効果は高いといってよい。

今でこそ、シラスの入手は常時可能だが、かつてはそう簡単にどこでも手に入るというものではなかったら
しい。坂本正文さんが、野根川上流の船津ではシラスが手に入らなかったため、乾燥したジャコをつかったと
いうのも、そうした事情を物語っている。

その点では、小アジは海の近くであれば、いつでもすぐに手に入るため広くつかわれてきた。アジを撒き餌

にする場合は、皮をはぎ内臓を取りのぞいた身の部分を少し噛み切り、口の中でよく噛んだのちプツと吹き飛ばす。現在、シラスを撒き餌にしている人のなかも、それ以前はアジ（あるいは白身の海魚）を噛んで撒き餌にしていた経験をもっている人は少なくない。

（3）汽水域とエサ釣り

松木一夫は、その著『高知のアユ釣り』（1996年）のなかで、野根川のエサ釣り名人である松尾龍太郎さんが語る、こんな話を紹介している。

秋の雨の後には、大アユが大釣れするから野根の町は大騒動になる。川には、それはもう竿が櫛のように立ち並ぶ。「今日は、ぎょうさん川に行っちゅう」というのが地区のあいさつ代わりになる。「もうアユも、あけゆうぜよ。シーレの花（彼岸花）が咲いたきに」というのも季節のあいさつ。十月初めに行われる秋の神祭の前にでも雨が降ろうものなら、そりゃ大事。「祭りはほっとけ」と男衆は皆、川に出る。神輿の担ぎ手がなく、町役が呼び出しに川に飛んで行くことになる。このころは、亭主のアユ釣りが原因で夫婦喧嘩も珍しくない〔松木 1996〕。

秋の出水があると、下流の野根の町は、落ちアユの話題で沸き立つような空気に包まれたようだ。時機到来にわくわくする雰囲気伝わってくる。落ちアユ釣りは男衆の大きな楽しみであり、それはまた実利を兼ねたものでもあったのだろう。また、彼岸花の開花を落ちアユの時期を意識する目安としているのは、生活のなかに自然暦が生きている伝承として興味深い。

依光良三は、エサ釣りについて「河川の勾配が急な奈半利川や安田川、伊尾木川などでは、大雨にともなう出水時には激流となるため、多くのアユは、流れに逆らえずに一旦海まで落ちる。3～4日で濁りがとれ、やがて水が落ち着いてくるとアユは再び上流をめざすが、しばらくは下流に沢山のアユが集中する。そのアユをねらって、シラスをこまめに、イカかシラス（ドロメ）をさし餌に使って、釣るのである」〔依光 1989〕と述べている。Kさんも「大水で落ちてきたアユは、一度海の潮を飲んでからまた川にもどる」と話されていたが、水が澄みはじめると群れをなして川に入ってくる。そのアユを河口付近で釣るのがエサ釣りのだいご味である。

依光によれば、エサ釣りは「当時（戦前）は出水後の一時期の釣りか、落ちアユのときの釣りに限られていた」という〔依光 1989〕。古老のアユ師の話として「かつてエサ釣りは、増水した後の一時期に限って行われていたが、昭和三十年代から平水時にも県東部を中心に盛んに行われるようになった」との報告もある〔松木 1996〕⁽³⁾。宮地伝三郎の『アユの話』でも、夏のアユ漁について「四国ではこの時期から性巣の熟する頃にかけて、えさ釣りが盛んらしい。イワシのシラスを使って釣るのであるが、やはり洪水のあとなどの藻の少ないときがよい」と書いている〔宮地 1960〕。

今も、出水をきっかけに下流に落ちてきたアユを重視する傾向は変わらないが、ただ現在はその時期だけでなく、平水時にも上流から下流まで広い範囲で釣っている。しかし、エサ釣りは本来、増水時や秋の出水を引き金に群れで落ちてきた食いの盛んなアユを、下流、とくに河口（汽水域）などで釣るのが主な狙いだったといつてよい。ここは海に近いだけに、さし餌や撒き餌の調達にも便利で、産卵前のアユを含めて、良型のアユを数多く釣ることができる諸条件が揃っている。⁽⁴⁾

平岡順さんが、クーラーにいくつも釣ったという旧の橋（海部川橋）の下手は、まさに汽水域である。海部川漁協の浦上家吉さんによれば、新海部川橋のあたりまで潮が入るといい、例年、落ちアユはこの橋より下で

釣る人が多いという。それだけ、河口付近の汽水域には落ちアユが集まっているのであろう。エサ釣りが狙う格好の対象である。平岡さんは「河口で潮がこんでくるときでも、ウキは少しずつ下に流れていくが、カブシもほとんど流されずに効くのでアユが多いときは釣りやすい」という⁽⁵⁾。

汽水域における落ちアユは、エサ釣りの狙い目で多くの釣り人を集めるが、一方で、平水時の汽水域でもエサ釣りは見られる。ここでの釣りの事例として、筆者の少年時代の体験を紹介した。ただ、潮の満ち引きによる食いの変化については、込み潮がよいとか引き潮がよいなどと言っていた記憶はあるが、具体的には覚えていない。この点は、新莊川の下流を釣り場に行っている市川誠郎さんの経験が興味深い。市川さんによれば、込み潮のときに食いが良いという。それも7、8分目ほどに上げてきたときがベストなので、潮の干満を見計らって釣りに出ることもあるという。安田町の松本義嗣さんにも、込み潮の方が釣れると聞いた。汽水の場合も、海釣り同様に潮がうごかない時は食いがわるいようだ。市川さんの話では、河口付近（汽水域）には潮に乗って上り下りの移動を繰り返すアユがいるという。

汽水域は、ふ化したアユの成育場としても重要で、ここから遡上するアユもいれば、河口近くに留まったまま上流を目指さないアユもいる〔高橋他 2016〕⁽⁶⁾。また、増水時や産卵のために下ってきたアユが汽水域に群れることも多く、早くからエサ釣りの対象として注目されてきた。釣りの技に工夫を重ねてただけでなく、落ちアユ釣りは河口の秋を彩るにぎわいでもあった。

【注】

- (1) 「3、久礼川のエサ釣り—高知県中土佐町—」は「汽水域における鮎のエサ釣り—高知県中土佐町久礼川—」と題して『年報 非文字資料研究』10号（2014年）に報告した内容の一部を修正したものである。
- (2) 久礼川でも、通常は見かけない大きなアユがたまにすることがあり、これをイリアイと呼んだ。松井魁『鮎』に「イリアユ—漁師用語。洪水で海に押し流されて再び元の川には戻らず、他の川に入った鮎」とあるが伝承地が不明。洪水などで海に流されたアユは、濁りが取れ始めたころに川に戻る。このようなアユを「差しもどしアユ」といい、必ずしも元の川に帰るわけではないという（宮地伝三郎『アユの話』、高橋勇夫・東健作『天然アユの本』）。宮地の『アユの話』では「洪水があると、そのあとのさし返しアユも、よい漁獲対象になる」と述べて、「兵庫県漁業慣行録 淡水漁業之部」（兵庫県水産試験場印行、昭和16年）を引いて「鮎の群来するは、河水暴漲したる後にあり、これを回り鮎と唱え、その来ること甚だ多し」の一文を紹介している。他の川のアユが入ってくるのは、松本義嗣さん、市川誠郎さん、平岡順さんの話にもでてくる。経験的に広く認識されているアユの行動の一つであろう（傍線は常光）。
- (3) 増水後だけでなく、平水時のエサ釣りも昭和30年代以前から行われていた。この点は、聞き書きや筆者が見てきた経験もから言えるが、それが高知県東部の河川で盛んになった、つまり、日常的に広く見られるようになったのが30年代以降ということであろう。
- (4) 汽水域の落ちアユをオキアミで釣っている所もある。埼玉県志木市宗岡にある秋ヶ瀬取水堰は荒川にある可動堰である。河口から35kmの地点にあるがこの堰までは潮の満ち引きの影響があり、ボラやスズキなどがのぼってくる。落ちアユの季節を迎えると堰の下手（汽水域）の岸には鮎のエサ釣りをする人が集まる。1993年10月下旬に見に行ったときには、土手には釣り具を売る軽トラックが止まりにぎわっていた。さし餌にはオキアミを使っていた。アユはやせているものが多かったが、それでも川が大きいだけに全体に型が良く、まれには尺（約30cm）近いものも釣れていた。ここでは、春に遡上する稚アユのエサ釣りをする人も見かける。
- (5) エサ釣りは入れ食いになるケースもあり、資源保護の見地から釣りの期間や釣り場について、友釣りより厳しく規制している川が多い（松木一夫『高知のアユ釣り』）。
- (6) 永澤正好『四万十川 II 川行き（田辺竹治翁聞書）』に、田辺翁の話として、鮎は潮境^{しおぞかい}でかえる（ふ化する）と見える。そして「ここらでは正木や井沢の辺りの潮水と真水の混ざったとこが温いがやけん。そこを水境^{みずざかい}というたり、潮境というたりした」という。汽水の境目を示す言葉として興味深い。

【引用・参考文献】

秋道智彌 1992年 『アユと日本人』丸善ライブラリー

井上静照著・吉村淑甫書写 1972年 『土佐群書集成（第三十巻）真覚寺日記 二』高知市立市民図書館

- 岡田芳郎 2006 年 『旧暦読本—現代に生きる「こよみ」の知恵』創元社
- 川那部浩哉・桜井淳史 1982 年 『アユの博物誌』平凡社
- 高橋勇夫・東健作 2016 年 『天然アユの本』築地書館
- 谷口順彦 1989 年 「土佐の河川の特徴」谷口順彦他著『土佐のアユ』高知県内水面漁業協同組合連合会
- 常光徹 2014 年 「汽水域における鮎のエサ釣り—高知県中土佐町久礼川—」『年報 非文字資料研究』10 号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
- 永澤正好 2006 年 『四万十川 II 川行き（田辺竹治翁聞書）』法政大学出版局
- 広谷喜十郎 1986 年 「土佐河川漁業史考」『歴史評論』429、校倉書房
- 古川彰 2008 年 「アユの来歴」山泰幸他著『環境民俗学—新しいフィールド学へ』昭和堂
- 松井魁 1986 年 『鮎—ものと人間の文化史 56』法政大学出版局
- 松木一夫 1996 年 『高知のアユ釣り』高知新聞社
- 宮地伝三郎 1960 年 『アユの話』岩波新書
- 宮地伝三郎 1994 年 「『アユの話』以後」『アユの話』同時代ライブラリー 192（岩波書店）
- 宮本常一 1969 年 『日本の子供たち・海をひらいた人びと』未来社
- 安室知 2014 「『汽水文化』の提唱に向けて—共同研究の中間報告と今後の展望—」『年報 非文字資料研究』10 号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
- 依光良三 1989 年 「土佐のアユ漁 今昔」谷口順彦他著『土佐のアユ』高知県内水面漁業協同組合連合会
- 高知県 2012 年 「久礼川水系整備計画」高知県
- www.pref.kochi.lg.jp/uploaded/attachment/64658.pdf